

『ニーベルンゲンの歌』における
leit と rechen の構造

石 川 栄 作

徳島大学教養部紀要（外国語・外国文学）第3巻 別刷

1992年3月

Journal of Foreign Languages and Literature

College of General Education

University of Tokushima

Volume III

March 1992

『ニーベルンゲンの歌』における
leit と rechen の構造

石 川 栄 作

Zur Struktur von *leit* und *rechen* im Nibelungenlied

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Die Doppelstruktur der Rache für *leit* findet sich im ganzen Nibelungenlied: Prünhiltis Rache für *leit* (Beleidigung) im ersten Teil und Kriemhiltis Rache für *leit* (Schmerz) im zweiten Teil. Hier möchten wir die Struktur von *leit* und *rechen* analysieren, um die innere Komposition der Tragik im Nibelungenlied zu ermitteln.

Die Ursache von Prünhiltis *leit* liegt ursprünglich darin, daß Sifrit zweimal bei Gunthers Werbung um Prünhilt mit der Tarnkappe dem König hilft. Diese kleine List verursacht später den heftigen Streit der beiden Frauen, wobei Prünhilt tödlich von Kriemhilt beleidigt wird. Prünhilt rächt sich aber für *leit* nicht an Kriemhilt, sondern an deren Mann Sifrit. Warum muß Sifrit der Königin die Beleidigung ersetzen? Was bedeutet Sifrits Tod im Gesamtkonzept des Werks?

Bemerkenswert ist, daß die Ermordung Sifrits erst von Hagene vorgeschlagen wird. Prünhiltis *leit* ist nur Anlaß zur verhängnisvollen Konfrontation Hagenes mit Sifrit. Nun kämpft Hagene schicksalhaft mit Sifrit um den Nibelungenhort. Dabei herrscht der Fluch des Schatzes: der Hortbesitzer Sifrit muß am Ende sterben. Daß Sifrit umkommen soll, deutet aber andererseits Kriemhiltis Falkentraum am Anfang des Werks an. Sifrit, der um Kriemhilt wirbt, muß nämlich wegen der *höhen minne* untergehen. In Sifrits Tod verschmelzen also das alt-germanische und das höfisch-ritterliche Moment.

Kriemhiltis *leit* bedeutet gerade den Jammer um den ermordeten Sifrit, der außerdem mit Hagenes Hortraub noch tiefer wird. Das ihr zweimal von Hagene angetane *herzenleit* verursacht schließlich ihren Racheakt. Kriemhilt rächt sich aber für *leit* nicht an Hagene allein, sondern an den ganzen Burgonden. Wieso muß die gesamte Sippe der Königin den Schmerz entgelten? Welche Bedeutung hat der Burgondenuntergang in der Konzeption des ganzen Nibelungenlieds?

Man soll nun darauf achten, daß die Burgonden nunmehr als die Nibelungen bezeichnet sind, wie Sifrits Sippe früher so genannt war. Die Burgonden, die mit Hagenes Rat und List untreu der Witwe Kriemhilt den Nibelungenschatz geraubt haben, sollen alle außer dem Kaplan schließlich untergehen, was die Wasserfrauen in der Donau weissagen. Daß der Fluch des Schatzes auch hier herrscht, deutet die Episode des Fergens an, der wegen der Goldgier umkommt. Es ist daher nie sinnlos, daß es sich in der Konfrontation Hagenes mit Kriemhilt gerade um den Nibelungenhort handelt. Der Schatz ist zwar für Hagene das Symbol der Macht, aber für Kriemhilt das Symbol der Liebe. Der Burgondenuntergang entfaltet sich in der Gegenüberstehung von dem Macht- und dem Liebe-Motiv. Im ganzen Nibelungenlied verschmelzen vielschichtig das alt-germanische und das höfisch-ritterliche Element.

序

ドイツ中世叙事詩『ニーベルンゲンの歌』は整然たる構成を有する作品である。北歐へ伝承された『ヴォルスンガ・サガ』や『ティードレクス・サガ』では構成の点で粗雑な傾向があり、単に素材を結び合わせただけという観を呈しているが、この『ニーベルンゲンの歌』では全体が有機的な関連を有しつつ、しかも結婚と招待の旅を軸として前編と後編とが均整のとれた二重構造を有しているのである¹⁾。すなわち、前編ではプリュンヒルトの leit の復讐が、そして後編ではクリエムヒルトの leit の復讐が、同じ結婚と招待という二重構造の中で繰り返し語られているのであり、『ニーベルンゲンの歌』全体は二つの leit の復讐の物語であるとも言えるのである。しかもこの二つの leit は本質的なところで異なっていて、対をなしていることも今や明らかである。前編で展開されるプリュンヒルトの leit の復讐は、つまり、「名誉」(êre) の「侮辱」からなされたものであるのに対して、後編におけるクリエムヒルトの leit の復讐は愛しい夫ジーフリトを失った「悲しみ」からなされたものだからである。素材においてクリエムヒルトの行動には財宝への欲望とジーフリトのための復讐という二つの衝動があり、この二つがいわば競い合っていたのである²⁾ が、『ニーベルンゲンの歌』においては新しいモチーフとしてクリエムヒルトはもっぱら夫への誠実な愛から復讐することとなり、名誉及び権力に固執するプリュンヒルトの rechen (復讐) と著しいコントラストをなす結果となったのである。

ところが、よく考えてみると、プリュンヒルトの leit (侮辱) の復讐は侮辱したクリエムヒルト本人に対してではなく、その夫ジーフリトに対してなされるのであり、また一方クリエムヒルトの leit (悲しみ) の復讐も殺害者ハゲネー人に対してではなく、ブルゴント族全体に対して実行されるのである。この辺の事情はどのように解釈したらよいのであろうか。しかも前編で leit の復讐をするプリュンヒルトは死ぬことなく、生き延びるのに対して、後編で leit の復讐をするクリエムヒルトは最後には壮絶な最期を遂げるのである。二つの leit の復讐には何かもっと別の意味が込められているのではあるまいか。作品全体をプリュンヒルトとクリエムヒルトの単なる二つの leit の復讐の物語と解するだけでは不十分なのである。では一体、前編のジーフリトの死と後編のブルゴント族の滅亡は、作品全体の構造の中でどのような意味を持っているのであろうか。本稿では、プリュンヒルトの leit (侮辱) 及びクリエムヒルトの leit (悲しみ) の厳密な意味、すなわち、両者の leit と rechen の構造をさらに詳しく分析することによって、『ニーベルンゲンの歌』全体における悲劇の内的構造の特質を探り出すことにしよう。

1) 拙稿：「ニーベルンゲンの歌」における悲劇の二重構造 — ジーフリトとリュエデゲール — 徳島大学教養部紀要(人文・社会科学)第23巻1988年巻末図式Ⅰ、Ⅱ参照。

2) 拙稿：ニーベルンゲン伝説と『ニーベルンゲンの歌』 徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)第1巻1990年158-9頁参照。

I. プリュンヒルトの leit と rechen の構造

1. プリュンヒルトの leit — 王妃としての恥辱 —

プリュンヒルトの leit (侮辱) は、全体のあらすじを眺めてみると、結局のところプリュンヒルトを求めてのグンテル王の求婚の旅にジーフリトが随行し、何の意図もない些細な策略を用いたことに基づいていると言えよう。すなわち、グンテル王は主君であり、ジーフリトはその家来である (386,3) という「詐欺的行為」と呼ぶことのできないほどの些細な策略を用いたことに端を発しているのである。この策略はジーフリトにしてみれば、ただクリエムヒルトの愛を得るため (388) だったのであるが、これがプリュンヒルトの leit のきっかけとなるのである。この些細な策略と隠れ蓑の使用とによってブルゴントの国で二組の結婚式が執り行われることとなった宴の席で、その leit はついに涙となって姿を現わす。

Der künic was gesezzen unt Prünhilt diu meit.
dô sah si Kriemhilde (done wart ir nie sô leit)
bî Sîfride sitzen: weinen si began.
ir vielen heize trähene über liehtiu wange dan. (618)

国王とプリュンヒルト姫とはすでに座についていたが、
彼女はクリエムヒルトがジーフリトと並んで坐っているのを見て、
泣き始めた。(こんな口惜しい (leit) ことはなかったのだ。)
熱い涙が、白い頬の上を流れ落ちた。

ここにおいて初めて表面化するプリュンヒルトの leit (口惜しさ)、すなわち、熱い涙を流す要因とは一体何なのであろうか。この涙に関してはこれまでさまざまに解釈されてきたところである³⁾。ジーフリトとプリュンヒルトは初めて出会った際に婚約を取り交わしていたという恋仲の関係が『歌謡エッダ』中の『シグルズの短い歌』⁴⁾ や『ヴォルスンガ・サガ』⁵⁾ に見出されることを考慮に入れるならば、確かにプリュンヒルトの涙の背後にあるものはジーフリトへの失恋、クリエムヒルトへの嫉妬であると解釈しても何ら不思議ではないであろう。しかし、『ニーベルンゲンの歌』においてジーフリトがグンテル王の伴をしてイースラントへ渡ったとき、そのような婚約関係は前提とされていない。それどころかプリュンヒルトは一行の中にジーフリトらしき人物がいることを家臣から聞き知ると、「もし勇敢なジーフリトが私の愛を得るためこの国へ来た

3) 桜井和市：プリュンヒルト＝ジーフリト伝説 — 歌謡と叙事詩 — (手塚富雄教授還暦記念論文集「ドイツ文学における伝統と革新」筑摩書房1965年) 参照。

4) 谷口幸男訳：エッダ — 古代北歐歌謡集 新潮社1973年154-61頁。

5) 菅原邦城訳：ゲルマン北歐の英雄伝説 — ヴォルスンガ・サガ 東海大学出版会1979年68-9頁及び75頁。

とあれば、それはあの人の命に^{かか}関わることだ」(416,2-3)と言って、挑戦的な態度さえ見せている。プリュンヒルトは『ニーベルンゲンの歌』ではとにかく高慢な女王として描かれていることが理解できよう。まさにこの女王としての誇りがこの結婚の宴の席で傷つけられるのである。グンテル王が彼女の涙を見て、その理由^{わけ}を尋ねると、プリュンヒルトは次のように自らの涙の原因を明らかにすることからもそれは明らかである。

《Ich mac wol balde weinen》, sprach diu schœene meit.
 《umbe dîne swester ist mir von herzen leit.
 die sihe ich sitzen nâhen dem eigenholden dîn.
 daz muoz ich immer weinen, sol si alsô verderbet sîn.》(620)

「私は泣かないわけには参りません、」と美しい姫が言った。
 「お妹君のことが、私は心から悲しい(leit)のでございます。
 あの方は臣下の身分の者と並んで坐っているではありませんか。
 あんなに身を^{おと}貶すなんて、泣かぬわけに参りません。」

プリュンヒルトは今やグンテル王の妃として「王家全体の恥辱」⁶⁾を感じているのである。国王グンテルの妹クリエムヒルトが家来である筈のジーフリトと夫婦関係を結んだことに高慢なプリュンヒルトは堪えられないのであり、グンテル王がいろいろと言いつくすに及んでは、その「恥辱」はただちに「疑惑」へと発展する。どうして義妹が家来の妻となったのか、事の筋道が判明しないうちは「処女のままでおります」(635,3)と言って、新婚の臥所ではグンテル王の愛撫を拒んでしまうのである。自分に対するグンテル王の求婚に何か欺瞞があったのではないかという疑惑から生ずる「恥辱」も今や働いていると考えて差し支えないであろう。プリュンヒルトは王妃としてばかりではなく、女性としても「恥辱」(Beleidigung, Entehrung)を受けているのである。

この「恥辱」(leit)は、しかしよく考えてみると、この段階においてはジーフリト殺害とは直接結びついてはいない。ここで重要なのは、このプリュンヒルトの抵抗に気分を害したグンテル王が力づくで彼女の愛を戦い取ろうとすると、彼女は自分の帯で王の手足を縛りあげ、彼を一本の釘にかけて壁に吊してしまったことである。グンテル王は、すなわち、国王として、また男としてこの上ない「屈辱と痛手」(laster unde schanden, 649,1)を被ったのであり、この沈んだ顔のグンテル王を見たジーフリトが事情を知ると、ジーフリトは再度隠れ蓑を用いてグンテル王の助力をするのである。この二度にわたるジーフリトの隠れ蓑を使つての援助によって、プリュンヒ

6) デ・ボーアのプロックハウス版のテキスト中の620詩節の脚注を参照のこと。

ルトはグンテル王の妻となり、表面上は一応静けさを取り戻したのであるが、しかし、プリュンヒルトの内面では逆により大きな leit (恥辱) の種が蒔かれる結果となったのである。

このプリュンヒルトの leit は、ジーフリトが王妃クリエムヒルトを連れてザンテンへ帰国したのちも拭い去られることがない。否、それどころか、逆に時とともに次第に大きくなっていく。ジーフリト夫妻が故国に帰って十年の歳月が経っても、家臣である筈のジーフリトは一向宮廷に伺候しないからである。グンテル王の妃としてプリュンヒルトはそのことを不思議に思い、「恥辱」(leit, 725, 2) だとさえ感じていたのである。この王妃としての「恥辱」(leit) を拭い取るため、プリュンヒルトは夫を言葉巧みに説き伏せて、招待という形でジーフリトとクリエムヒルトをブルゴント国に呼び寄せるが、この leit を取り除こうとした行為が、逆にその leit を大きくする結果となるのである。

そのきっかけとなるのが両王妃口論であり、それは、勇士たちの競技を見物していた二人がそれぞれの夫の自慢話をしたことに始まる。高慢なプリュンヒルトは、まずジーフリト自らが自分はグンテル王の家来であると言った (821, 2; vgl. 420, 4) ことを楯に取り攻撃をしかけてくるが、それに対してクリエムヒルトは自らの夫の方がもっと高貴な身分の者 (824, 2-3) であると主張する。ジーフリトがグンテル王の家来であり、従って、プリュンヒルトがジーフリトとクリエムヒルトの二人を支配しているというプリュンヒルトの主張は、ジーフリト夫妻が長い間安閑と貢物をしないでいた事実からも奇妙なこと (vgl. 825, 1-3) であり、また実際グンテル王によっても以前プリュンヒルトに向かって根拠のないものとして説明されている (vgl. 623) のだから、それはクリエムヒルトによって「権柄ずくな言葉」(übermüete, 825, 4) としてはねつけられるばかりである。さらに王妃たちが競って侍女たちを従えて進んで行った大聖堂の前では、しかも侍女たちの目前で、プリュンヒルトはこの上ない屈辱を受け、プリュンヒルトの「辱しめ」はますます大きくなっていくばかりである。「臣下の分際で、国王の妃に先立つという法はない」(837, 4) という言葉に怒りを覚えたクリエムヒルトは、すなわち、グンテル王の結婚の夜の秘密を暴露することによって、プリュンヒルトをジーフリトの「側女」(kebse, 839, 4) だと罵った上、彼女に先んじて寺院の中へ入って行くのである。どんなに勤行が行われ、またミサが誦詠せられても、プリュンヒルトはただ時の長いのみを感じるのみであった (844, 1-2) が、ミサが終わって寺院の外に出ると、プリュンヒルトはその罵りの言葉をもっとよく訊き糾さずにはいられない。

dô sprach diu vrouwe Prünhilt: 《ir sult noch stille stân.
ir jâhet mîn ze kebesen: daz sult ir lâzen sehen.
mir ist von iuvern sprûchen, daz wizzet, leide geschehen.》 (846, 2-4)

Dô sprach diu vrouwe Kriemhilt: 《ir möhtet mich lâzen gân.
ich erziugez mit dem golde, daz ich an der hende hân.

daz brâhte mir mîn vriedel, do er êrste bî iu lac.》
 nie gelebte Prünhilt deheinen leideren tac. (847)

王妃プリュンヒルトが声をかけた、「お待ちなさい。
 あなたは私を側女^{そばめ}だと仰しゃったが、証拠でもあるのですか。
 あんなことを言われては、私も口惜しい (leide) のですから。」

王妃クリエムヒルトが答えた、「お留めにならぬほうがよろしいのに。
 証拠はこの私の手にある金の指輪です。
 これは夫が初めてあなたの側に寝^{やす}んだ時、私に持ってきてくれたのです。」
 プリュンヒルトにとってこんな口惜しい (leider) ことはなかった。

この上ない屈辱を受けたプリュンヒルトは「この指輪は盗み取られていたものです。誰が盗んだのか、今ようやく分かりました」(848,1-3)と反論しても、それがむしろ決定的な「恥辱」のきっかけとなる。

Dô sprach aber Kriemhilt: 《ine wils niht wesen diep.
 du möhtes wol gedaget hân, und wære dir êre liep.
 ich erziugez mit dem gürtel, den ich hie umbe hân,
 daz ich niht enliuge: jâ wart mîn Sifrit dîn man.》 (849)

クリエムヒルトが再び言った。「私は盗人ではないはずですが。
 あなたが名誉 (êre) を重んじられるなら、黙っておられればよいのに。
 私が嘘^{うそ}つきでない証拠には、私が締めている
 この帯をごらんください。夫は確かにあなたを側女^{そばめ}としたのです。」

ここにおいて王妃としてのプリュンヒルトの「名誉」(êre)は、ほとんど埋め合わせられないほどに傷つけられている。彼女自身グンテル王に向かって「ひどい恥辱」(der vil grôzen schande, 854,4)を訴えている。

《Si treit hie mînen gürtel, den ich hân verlorn,
 und mîn golt daz rôte. daz ich ie wart geborn,
 daz riuwet mich vil sêre, dune beredest, künic, mich
 der vil grôzen schande; daz diene ich immer umbe dich.》 (854)

「あの方は私が失くした帯を締め、私の純金の指輪をはめているのです。
もしあなたが私のこのひどい恥辱 (schande) を弁明して下さらないなら、
私は生まれたことを口惜しく存じます。
弁明して下さるなら、いつまでも恩に着ますが。」

先に引用した846詩節と847詩節における leit (口惜しさ) は、ここにおいて schande (恥辱、不名誉) で代用されていることは注目すべきである。両王妃の口論におけるプリュンヒルトの決定的な leit は、schande と同一的に用いられ、明らかに「名誉」(êre) の反対概念としての「恥辱」(schande) である。すなわち、この口論においてプリュンヒルトに対して決定的に加えられた leit は、本質的には王妃あるいは女性としての「名誉」(êre) の「恥辱」(schande) であり、具体的に言えば、論駁できないような証拠を突きつけられて「側女」と罵られた「恥辱」なのである。このようにプリュンヒルトの leit は、結婚の際の疑惑を経て、招待の宴の席でクリエムヒルトと口論を始めることによってだんだんと高まりを見せていることは明らかであり、こうして口論の結末として頂点に達した恥辱がジーフリト殺害へと発展していくのである。

2. プリュンヒルトの rechen — ジーフリトの死 —

このように高慢な王妃プリュンヒルトはクリエムヒルトの罵りによってこの上ない「恥辱」を受け、これがジーフリト殺害のきっかけとなるのであるが、では、一体なぜこの「名誉」の「恥辱」をクリエムヒルトではなく、その夫ジーフリトが死でもって償わなければならないのであろうか。大聖堂の前で証拠を見せつけられる前にプリュンヒルトが「もしジーフリトがそんな事を言い触らすなら生かしてもおけぬ」(845,4) と言っているように、ジーフリトの死は、結局のところ、ジーフリトが自らの冒険談を妻に自慢げに語ったからであろうか。プリュンヒルトの訴えを聞いたグンテル王は「もし彼がそんなことを自慢して言ったなら、よく糾明するし、さもなければ、ニーデルラントの勇士は一件を取り消さなければならぬ」(855,2-3) と言ってジーフリトに真相を質したところ、ジーフリトは誓言を立てて、妻の罵った行為がなかったことを明言する。グンテル王も「妹の言ったようなことは、全くの無実の罪であったのだ」(860,4) と言っている。従って、ジーフリトの死は、ジーフリトがプリュンヒルトの秘密を妻に言い触らしたのではなく、やはり偽りでもってクリエムヒルトがプリュンヒルトを「側女」と罵ったことにある。しかし、それでもジーフリトがそれを死でもって償わなければならないのである。一体なぜジーフリトにその恥辱の償いが課せられるのであろうか。

ここで注目すべきは、北歐へ伝承された『シグルズの短い歌』⁷⁾ や『ヴォルスンガ・サガ』⁸⁾ ではプリュンヒルト (ブリュンヒルド) がジーフリト (シグルズ) 殺害を要求し、ハゲネ (ヘグニ

7) 谷口幸男訳：前掲書156頁参照。

8) 菅原邦城訳：前掲書104-5頁参照。

あるいはホグニ)はむしろ諫止する側にあるのに対して、『ニーベルンゲンの歌』では暗殺の提案はハゲネの口から初めて出てくることである。ハゲネは、すなわち、ジーフリトの謝罪ののちもなお打ち萎れているプリュンヒルトから子細を聞き知ると、「それはクリエムヒルトの夫が償わねばならない」(864,3)と誓うのである。ギーゼルヘルが諫止すると、ハゲネは皆にも向かって殺害の意図を明らかにする。

《Suln wir gouche ziehen?》 sprach aber Hagene:
 《des habent lützel êre sô guote degene.
 daz er sich hât gertüemet der lieben vrouwen mîn,
 dar umbe wil ich sterben, ez engê im an daz leben sîn.》(867)

「私たちは私生児を長く養っておくべきでしょうか、」
 ハゲネが言い返した、「それは立派な武士の名誉ではありません。
 お妃様の一件を自慢話にしたとあっては、
 あの人の命をもらうか、さもなければ自分で死んでしまいます。」

このようにジーフリトの殺害は、ここでは自慢話が表面に出ているが、しかし、それは口実に過ぎないのであって、ハゲネの心の中にはジーフリトに対する宿命的な敵意があったのではあるまいか。なぜなら、そのあとの詩節ですぐにこう語られているからである。

Sîn gevolgete niemen, niwan daz Hagene
 geriet in allen ziten Gunther dem degene,
 ob Sifrit niht enlebte, sô wurde im undertân
 vil der kûnege lande. der helt des trûren began. (870)

この一件をさらに追究しようとする者は誰もいなかったが、
 ただハゲネのみは終始グンテル王を唆し、もしジーフリトが
 亡^ないものとなれば、あまたの国々が王の領土となるであろうと説いた。
 それで国王は憂鬱な気持ちになってきた。

従って、プリュンヒルトの「恥辱」はジーフリト暗殺のきっかけとなっているに過ぎない。ここではジーフリトとハゲネとの宿命的な対立があるのである。権力をめぐっての宿命的な対立である。ハゲネが最初からジーフリトの財宝に目をつけていたことは、拙稿⁹⁾ですでに述べたところ

9) 拙稿：ニーベルンゲン悲劇の構図——ハゲネの役割——徳島大学教養部紀要(人文・社会科学)第24巻1989年236-40頁参照。

からも明らかであるが、財宝をめぐるここでジーフリトとハゲネとが戦うのであり、クリエムヒルトとプリュンヒルトとの戦いはこれら二人の勇士たちの戦いにほかならない。ハゲネの策略によってジーフリトが減びていくのも、それは結局のところ財宝の呪いによる死なのである。ジーフリトはニーベルンゲン族を打ち倒し、侏儒アルプリーヒからは隠れ蓑をも奪い取って、ニーベルンゲン財宝のことごとくを所有してしまった(97,4)がゆえに、最後には死ななければならないのである。その財宝の一つである隠れ蓑(Tarnkappe)は、「秘密な」(tarn) — 中世ドイツ語で「隠れる」(tarnen)から出た形容詞 — 「オーバー」(kappe=mantel) という意味¹⁰⁾であり、そのオーバーを着れば、姿が見えなくなるという魔法の宝物である。事実、ジーフリトはのちにこの隠れ蓑を身につけて二度にわたって秘策を実行したがために、ついにはハゲネに殺害されてしまう運命にあったのである。暗殺後、宝庫の番人アルプリーヒはそのことを明らかに語っている。

《Nu ist ez Sifride leider übel komen,
daz uns die tarnkappen het der helt benomen
unt daz im muose dienen allez ditze lant.》(1120,1-3)

「ところが、あの勇士が我々から隠れ蓑を奪いとり、
この国全土があの方の支配するところとなったということが、
結局あの方の不幸を招くこととなったのだ。」

隠れ蓑が素材において用いられた形跡はなく、『ニーベルンゲンの歌』の作者が初めて導入したものであるにしても、ジーフリトの死にはとにかくニーベルンゲン財宝の霊の力が働いていたことが明らかである。ジーフリトは今やニーベルンゲン族(778;1003;1011;1058;1071;1095)と呼ばれていることにも注目する必要がある。「ニーベルンゲン」(Nibelungen)とは暗黒を意味し、ニーベルンゲンの宝を持つ者は滅びなければならない¹¹⁾。ジーフリトはニーベルンゲンの宝の所有者となり、ニーベルンゲン国の主人となったがために、滅びなければならない運命にあるのである。ここには古代ゲルマンのニーベルンゲン伝説に由来する不思議な力が作用しており、前編の主人公ともいうべきジーフリトは最初から死すべき運命にある古代ゲルマンの英雄である。ここではジーフリトは死すべきであるという素材の伝説に由来する古代ゲルマン的な運命が支配しているのである。

ジーフリトが死すべき運命にあったことは、しかし、一方で作品の冒頭で語られる「クリエムヒルトの鷹の夢」においてすでに暗示されている。母后ウオテの夢占いを聞いた姫クリエムヒル

10) 吉村貞司：ニーベルンゲン伝説 鎌倉書房1943年41頁参照。

11) 同上書38-9頁参照。

トは、「男の愛情 (mannes minne) のために災い (nôt) などうけたりしないよう」(15,4) に、心のうちで「恋」(minne, 18,1) というものをあきらめて、長い年月、楽しい日々を送り迎えた。だがやがて彼女も、嗜れて或る勇士の妻となる日がきた(18,4) のであり、その勇士こそジーフリトであったことは、その「鷹の夢」の直後に彼が紹介されて登場していることから明らかである。ジーフリトは、すなわち、「位たかき乙女の愛」(hôhe minne, 47,1) を求めてブルゴントの国に出かけて行く限り、その愛のために滅びなければならない運命にあったのである。事実、その愛のためにはザクセン戦争に出征するばかりか、ついにはグンテル王のイースラントへの旅にも随行し、偽りの主従関係をも結ぶことによって、自ら破滅の遠因を作ってしまった。その偽りの主従関係がもとで両王妃の間に激しい口論が起こり、上でも述べたように、その際受けたプリュンヒルトの leit によってジーフリトとハゲネとの宿命的な対立がついに表面化するに至ったのである。従って、この作品の中ではミンネを求める勇士の死が古い素材に由来する財宝の呪いによる死と重なっているものであり、ここには中世騎士的な要素と古代ゲルマン的な要素とが見事に溶け合い、重なり合っていると見えよう。中世的なミンネもここでは古代ゲルマン的運命観の支配下にあるのであり、「高きミンネ」も成就されると同時に、古代ゲルマン的な運命によって脆くも崩れ落ちてしまうのである。ここにミンネを求めるジーフリトの悲劇の特質があるのである。

II. クリエムヒルトの leit と rechen の構造

1. クリエムヒルトの leit — 夫の死による悲痛 —

以上のように見てくると、ジーフリトの死にはともかくジーフリトとハゲネとの宿命的な対立が根本にあり、プリュンヒルトの leit (恥辱) はその対立を深めるきっかけに過ぎないことが明らかである。『ニーベルンゲンの歌』においてはプリュンヒルトの leit はもはや問題ではないのである。そのことは、彼女が諸伝承のように自ら死を遂げて強烈な印象を与えることもなく、突然物語の筋立から姿を消していることから明らかであり、今や詩人は、愛しい夫ジーフリトを殺害されたクリエムヒルトの leit に注目しているのである。しかもクリエムヒルトの leit は、もっぱら「名誉」(êre) の反対概念としてのみ用いられていたプリュンヒルトの leit とは対照的に、実に多種多様の意味で用いられている。ジーフリトがブルゴント国王たちに伴って領地を見回りに出かけるときに感ずるクリエムヒルトの leit (137,3) は、lieb の反対概念として用いられており¹²⁾、また故郷ブルゴントへの招待を受けたときの彼女の leit (741,3) は「愛慕・思慕、懐郷の念」(Sehnsucht, Heimweh) の意味である¹³⁾。しかし、ジーフリト暗殺に際してのクリエムヒルトの leit — この叙事詩の理解のためにはきわめて重要なクリエムヒルトの leit — に関しては、まず第一に「愛する者を失った悲しみ」として用いられている¹⁴⁾ と言ってよいのではあるまいか。

12) 拙稿：「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」における leit の研究 徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）第16巻1981年177頁参照。

13) 同上論文183頁参照。

14) 同上論文198頁参照。

この leit は作品の冒頭にある「鷹の夢」においてすでに予示されているが、その本来の leit が具体的に姿を現わすのは、上で見てきた両王妃口論後のことである。その leit の影はまずジーフリトのための *sorge* (心配) として現われる。

《Iedoch bin ich in sorgen, swenn' er in strîte stât
und vil der gêrschüzze von helden hande gât,
daz ich dâ verliese den mînen lieben man.
hey waz ich grôzer sorge (leide, C) dicke umbe Sifriden hân!》(900)

「ただ私が恐れる (in sorgen) のは、もしあの人^がが戦場に立って、
勇士たちの手から沢山の投槍が飛んできたりしたら、
私は愛する夫を失いはしないかということです。ほんとに私は
時々ジーフリトのために、ひどく心^を痛めて (*sorge*) いますから。」

ここで四行目の *sorge* (写本 B) が写本 C では *leide* となっていることは注目すべきである。*sorge* がのちに leit を生むことは必定である。クリエムヒルトは、止せばいいのに、ハゲネが信実 (triuwe, 901, 2) を尽くしてくれることを信じて、夫の急所 — 竜の血を身体に浴びた際一枚の菩提樹の葉が落ちてきた、あの両方の肩の骨の間こそジーフリトの急所であるという彼女の「心配の種」(sorgen, 902, 4) — を打ち明けたからである。彼女は夫の恙^{つづが}なきを願ったのに、それが結局命を縮めることとなる。プリュンヒルトが leit を取り除こうとすると逆に leit をふやす結果となったように、クリエムヒルトの場合も、*sorge* を取り除こうとしたことが、反対に *sorge* としての leit を増やす結果となったのである。偽りの戦いが中止となって、狩りに行くこととなった朝のことである。その *sorge* は「厭^いな」(*leide*) 夢となって現われてくる。

Si sprach zuo dem recken: ‹lât iuwer jagen sîn.
mir troumte hînte leide, wie iuch zwei wildiu swîn
jageten über heide, dâ wurden bluomen rôt.
daz ich sô sêre weine, des gêt mir wærliche nôt.》(921)

彼女は勇士に言った、「狩りはお止めなさいまし。

昨夜、私は二匹の猪が、野原であなたを追いかけている

厭^いな (*leide*) 夢を見ました。草花が朱^{あけ}に染まったのです。

私がこんなに泣くというのも、わけのないことはありませんもの。」

「可愛い妃よ、わしは日ならずして帰って来る」(923,1) と軽くあしらうジーフリトに向かってクリエムヒルトは再度恐れを訴える。

《Neinā, herre Sifrit! jā fürht ich dīnen val.
mir troumte hīnte leide, wie ob dir zetal
vielen zwēne berge: ine gesach dich nimmer mē.
wil du von mir scheiden, daz tuot mir an dem herzen wē.》(924)

「いいえ、ジーフリト様、私はあなたが最期を遂げられるのが怖いのです。
昨夜、私は二つの山があなたの上に崩れかかる厭な (leide) 夢を見ました。
もうあなたの姿が見えないのです。
別れてゆかれるのが、心から悲しくてなりません。」

このように嘆いたにもかかわらず、ジーフリトはほどなく別れの挨拶をして出かけて行ったが、果たして彼女はその後二度と、健やかな彼を見ることができない運命にあったのである。翌朝、「一人の騎士が部屋の前に斃れています」(1007,3) という知らせを侍臣から聞いたとき、クリエムヒルトはすぐにそれがジーフリトであることを悟ったのか、常ならず激しく嘆き始めた。

Ê daz si reht' erfunde, daz iz wære ir man,
an die Hagenen vrāge denken si began,
wie er in solde vristen; dō wart ir êrste leit.
von ir was allen vreuden mit sīnem tōde widerseit. (1008)

それが夫であることを、彼女が確かめるに先立って、
彼の身をどうして護ったらよいかというハゲネの問いを彼女は思い出した。
そこで彼女は初めて悲しみ (leit) に打たれたのである。
彼の死と共に、彼女は一切の歓楽に思いを断った。

このときクリエムヒルトの本来の leit は始まったのである。彼女の「悲嘆」(jāmer, 1009,3) は果てしなく、「心の痛手」(von herzen jāmer, 1010,2) のために、彼女の口からは血がほとぼしった。斃れていた勇士は赤く血潮に染まっていたが、ジーフリトであることがすぐに確認された。「悲しめる王妃」(diu jāmerhafte, 1014,1) は使者を通じてニーベルンゲン国の父王ジゲムントに彼女の「悲しみ」(jāmer, 1014,5) を伝えさせるが、このクリエムヒルトの悲嘆は埋葬の際に頂点に達する。埋葬直前に貞節な妻 (ir getriuwer līp, 1066,2) として「悲痛」(jāmer, 1066,2) のあま

り悶絶しそうになったクリエムヒルトはこう願ひ出るのである。

《Lât mir nâch mînem leide daz kleine liep geschehen,
daz ich sîn schœne houbet noch eines müeze sehen.》(1068,1-2)

「私の嘆き (leide) の後に、ささやかな喜び (liep) を私に与えておくれ。
あの方の美しい顔をもう一度拝ませてもらいたいのだ。」

彼女は「その哀傷の念の強さに」(mit jâmers sinnen starc, 1068, 3)、いつまでもそれを願ってやまなかつたので、立派な棺は破られなければならなかつた。クリエムヒルトは今や死せる気高い勇士に口づけをし、彼女の明るい眼からは、「悲痛のあまり」(vor leide, 1069, 4) 血の涙が流れ、^{ようぢょう}窈窕たる婦人は「傷心のために」(vor leide, 1070, 4) 玉の緒も絶えんばかりである。このような彼女のこの上ない悲嘆からここで明確に言えるのは、ヴェルナー・シュレーダー¹⁵⁾ が主張しているように、クリエムヒルトはジーフリトの死を悲しんでいるのであって、決して彼女が関与したジーフリトの権力のことを悲しんでいるのではないということである。すでに何度か出てきたが、ジーフリト殺害後、クリエムヒルトは強調されかつ繰り返されて「悲しめる王妃」(diu jâmerhafte, 1014, 1) ないし「悲しめる女性」(daz jâmerhafte wîp, 1041, 4; C 1424, 4; C 2432, 4) あるいは「悩み多き妃」(diu jâmers rîche, 1031, 1; C 1125, 4; C 1164, 1; 1218, 1) と表現され、また彼女自身「私はみじめな女」(ich jâmerhaftez wîp, 1259, 3) と呼んでいることはそのために特に注目すべきことである。なぜなら、この付加語的表現は、プリュンヒルトのために用いられている写本 C 1555 詩節 4 行目 (daz jâmerhafte wîp) の一箇所を除けば、『ニーベルンゲンの歌』ではもっぱらクリエムヒルトのために用いられているからである。この表現が彼女のためにのみ用いられているのも決して偶然ではない¹⁶⁾ のであり、そこに含まれているのはまさに「心痛」、ジーフリトの死による「悲しみ」であり、ジーフリト暗殺によるクリエムヒルトの leit は、詩人によって交互に leit と jâmer で表現されている全く取り乱した「悲しみ」であると言ってよいであろう。しかし、この「悲しみ」(leit) だけでは復讐へとはまだ移らない。プリュンヒルトがさらに leit を受けたように、クリエムヒルトもまたより大きな leit を受けることになるのである。ハゲネによる財宝強奪がすなわちそれである。この不実な財宝強奪は、クリエムヒルトにとっては新たな leit を意味している。その場面は次のように語られている。

Mit iteniuwen leiden beswæret was ir muot,
umb ir mannes ende, unt dô si ir daz guot

15) Vgl. Werner SCHRÖDER: Die Tragödie Kriemhiltis im Nibelungenlied. ZfdA. 90 (1960/61) S. 63.

16) Vgl. ebd. S. 61.

alsô gar genâmen. dô gestuont ir klage
des lîbes nimmer mêre unz an ir jungesten tage. (1141)

かくて夫の死と、彼らから宝を全部奪われたこととで、
彼女の心は新たな悩み (iteniuwen leiden) のためにいとど重くなったが、
彼女の嘆きは生きている限り、
最後の日に至るまで、止むこととはなかったのである。

一見してこの詩節は、ハゲネの財宝強奪によってクリエムヒルトの「名誉」(êre) — なかでも権力状態に基づく彼女の「名誉」(êre) — が侵害されていることを示していると言ってよいかも知れない。財宝強奪という卑劣な行為によってクリエムヒルトは愛する夫の復讐をするための権力手段を奪い取られてしまったと考えられるのである。まさにこの詩節を支えとして、例えば、フリードリヒ・マウラーは、クリエムヒルトの leit を「名誉」(êre) の侮辱として解釈しているのである¹⁷⁾。ハゲネから見れば、なるほど財宝強奪は権力状態に基づくクリエムヒルトの名誉 (êre) であると言っても差し支えないであろう。しかし、クリエムヒルト側から見ればどうであろうか。テキストを入念に読んでみると、W. シュレーダーが指摘しているように、クリエムヒルトが夫の死と財宝強奪で新たな leit を経験したということは、そのほかの理由を持っていることが明らかである。すなわち、ニーベルンゲンの宝は結婚の折に彼女に贈られた「^{きぬぎぬ}後朝の引出物」(morgengâbe, 1116, 4) であり、ジーフリトが彼女に残した唯一のものであるだけに、それはそれだけ一層象徴的な意味を有しているのである¹⁸⁾。それを侵害できないことは、剛勇なるアルプリーヒも強調している (1118, 3-4)。詩人も、1126詩節において、財宝それ自体ではなく、ジーフリトが問題であることをほのめかしている。従って、クリエムヒルトの「新たな」(iteniuwiu) leit とは、ジーフリトの象徴である財宝を強奪されることによって「夫殺害による leit」がさらに深くなったという意味に解すべきであろう。まさにこの新たな leit からクリエムヒルトはついに復讐を決意するのである。クリエムヒルトの leit を「贖う」(ergetzen) ものとてはもはや「復讐」(rechen) 以外にはないのである。やがてリュエデゲールの誓いによって再婚の決意をするが、しかし、それもただひたすら愛しい夫の復讐を考えてのことであり、エッツェル王の権力は目的としてではなく、ただ単に復讐の手段としてのみ興味があったのである。クリエムヒルトの leit (夫を失った悲しみ) はこうして「復讐する」(errechen) ことを強要し、彼女の残りの生涯は愛しい夫の復讐のために捧げられるのである。

17) Vgl. Friedrich MAURER: Leid. Studien zur Bedeutungs- und Problemgeschichte, besonders in den großen Epen der staufischen Zeit. Bern/München 1951. S. 30.

18) Vgl. W. SCHRÖDER: a. a. O., S. 67.

2. クリエムヒルトの rechen — ブルゴント族の滅亡 —

このようにクリエムヒルトはハゲネの二度にわたる策略によって「夫の死による悲しみ」を深められ、これがブルゴント族全滅のきっかけとなるのであるが、では一体なぜこの「悲しみ」(leit) はハゲネ一人ではなく、ブルゴント族全体がその全滅でもって償わなければならないのであろうか。

ここで注目したいのは、上でもすでに指摘した通り、前編では侏儒族からニーベルンゲンの財宝を奪い取ったジーフリトがニーベルンゲン族と呼ばれていた¹⁹⁾ のに対して、後編においてはフン族の国へ出かけるブルゴント族がニーベルンゲン族 (1523,1;1526,2;1527,2) と呼ばれていることである。『ニーベルンゲンの歌』においてはニーベルンゲン財宝を所有した者がニーベルンゲン族と呼ばれていることを考慮すれば、今やジーフリトから財宝を奪い取ったブルゴント一族の滅亡は宿命的事実であることが明らかである。前編と同じように後編においてもここで素材に由来する財宝の呪いが支配しているのである。すなわち、ブルゴント族は、ニーベルンゲンの財宝をクリエムヒルトから無理やり奪い取ったがためにジーフリトと同様、所有するや否や、滅びていかなければならない運命にあったのである。ここでブルゴント族がジーフリト暗殺後、さらにクリエムヒルトから財宝を盗み出したという筋立も決して偶然的な付け足しではなく、全体の構成のためにはなくてはならないものであったことが理解できよう。

ブルゴント族が滅びなければならぬ運命にあったことは、事実、彼らがドーナウ河を渡る際に明らかとなる。出発して十二日目の朝、一行がドーナウ河畔に達したとき、河水は氾濫して流れも極めて速かった。しかも船は隠されていて影もない。そこでハゲネが渡し守を探しに出かけた際に、水の乙女たちに出会い、次のような予言を受けるのである。

Dô sprach daz ander merewîp:	diu hiez Sigelint:
《ich wil dich warnen, Hagene,	daz Aldriânes kint.
durch der wæte liebe	hât mîn muome dir gelogen.
kumestu hin zen Hiunen,	sô bistu sêre betrogen. (1539)

Jâ soltu kêren widere;	daz ist an der zît,
wand' ir helde küene	alsô geladet sît,
daz ir sterben müezet	in Etzelen lant.
swelhe dar gerîtent,	die habent den tût an der hant.》(1540)

...

Dô sprach aber diu eine:	《ez muoz alsô wesen,
--------------------------	----------------------

19) 本稿135頁参照。

daz iuwer deheiner kan dā niht genesen,
 niwan des küneges kappelân, daz ist uns wol bekant.
 der kumet gesunder widere in daz Guntheres lant.》(1542)

ジゲリントという別の水の乙女がいった、
 「アルドリアーンの子ハゲネ様、私はあなたにご注意しますわ。
 私の叔母は今、衣がほしいものだから嘘をついたのです。
 あなたがフン族の国へ行ったら、とんだ目にあわされますよ。

さあ、引き返しなさいな。今が分かれ目よ。
 あなた方、勇ましいお武家さんたちがエッツェルの国に招かれたのは、
 むこうで殺されるためなのです。
 あすこへ行く人は、死神について行くようなものだよ。」

一人の乙女が重ねていった、「王室の司祭さん一人を除いて、
 ほかにあなた方だれも生きて帰れないことは、
 ちゃんとしまっていることなんです。それはようくわかっています、
 司祭さんはきっとグンテル王の国に帰れるんですから。」

そこでハゲネは渡河の際に司祭を河の中へ突き落とすが、司祭は神の御手に救われて無事に元の岸に辿り着くことができた。それによって司祭のみが逆に助かる結果となるのであり、この有様を見てハゲネは水の乙女たちが占ったことは宿命だと悟ったのである。前編で鷹の夢がジーフリの死を予言していたように、後編でも水の乙女たちがブルゴント族の全滅を予言しているのである。そしてその滅亡は、なるほど明確な言葉によって表現されてはいないが、しかし、財宝の呪いによるものと考えてよいであろう。大きな宝を貪ろうとすると、惨めな終わりを告げるものだ(1554,2)ということは、ちょうどそのドーナウ河渡河の場面において、渡し守の挿話(vgl. 1549-62)が暗示しているからである。渡し守は、すなわち、ハゲネの見事な黄金を得ようと思い、そのためハゲネの刃にかかって恐ろしい最期を遂げたのである。この渡し守の挿話は、まさにドーナウ河を渡ろうとしているブルゴント族の運命を暗示していると考えてもよいのではあるまいか。

このように見てくると、ブルゴント族滅亡にはクリエムヒルトの「夫の死による悲しみ」と、素材に由来する財宝の霊の力とが混ざり合っていることが明らかである。従って、すでに拙稿²⁰⁾

20) 拙稿：『ニーベルンゲンの歌』におけるクリエムヒルト像の特質 九州大学独文学会「九州ドイツ文学」第4号49-53頁参照。

で述べたように、クリエムヒルトとハゲネとの三度にも及ぶ激しい対決において最初から財宝が関与しているのも決して偶然ではないのである。否、それどころか、財宝をめぐる問答は、クリエムヒルトの再婚の決意の場面（1260,4;1276,1-3）とその再婚にハゲネが激しく反対する場面（1272-3）においてすでに認められるのである。以後、後編において繰り広げられるクリエムヒルトとハゲネとの対決は、まさにこのニーベルンゲンの財宝をめぐる戦いにほかならない。ニーベルンゲンの財宝は、ハゲネにとっては権力の象徴であり、クリエムヒルトにとっては愛しい夫ジーフリトの象徴である。ここにクリエムヒルトの「愛」のモチーフとハゲネの「権力」のモチーフの交錯が認められるが、この二人の個人的な対立は、まさにニーベルンゲンの財宝の呪いによって、ブルゴント族とフン族との対立という団体的な戦闘へと発展していくのである。

その個人的な対立から全体的な衝突へと発展していく大きなきっかけが王子オルトリエプの殺害であることは言うまでもない。ベルネの君主ディエトリーヒとその老臣ヒルデブラントから援助を拒否されたクリエムヒルトは、戦いを始めるのに他に方法とはなかったので、エッツェルとの間に生まれた王子を饗宴の席へと連れ出させた（1912-3）のである。愛しい夫ジーフリトの復讐のためには手段を選ばぬこのクリエムヒルトの挑戦的な態度に対して、ハゲネの方も負けてはいない。ハゲネは好意的な挨拶をするエッツェル王に向かって「さりながらこの若い王子は薄命の相をもっておられる」（1918,3）などという不気味な返事をする。そのみか、実際のちに、彼は王子オルトリエプに一撃を加えて、その首級を母クリエムヒルトの膝もとに斬り落としてしまう。このハゲネの残虐な仕打ちによってエッツェル王ももはや好意的な国王のままではできない。王子ばかりではなく、イーリンク、イルンフリト及びハーワルト等の味方を失ったエッツェル王は、もはや和議に応ずる意志は一切見せず（2089-90）に、きっぱりと「おん身たちは一人として生かして帰すことはできない」（2095,4）とさえ言う。このエッツェル王の参戦によって、戦いは今やハゲネとクリエムヒルトとの個人的な対立ではなく、ブルゴント族とフン族との間の一族をあげての戦いへと発展していくが、この両民族の対立の中でこの上ない苦痛を味わったのがベッヒェラーレンの辺境伯リュエデゲールである。この誠実な勇士リュエデゲールの悲惨な死がさらにベルネの君主ディエトリーヒの参戦を呼び起こし、leit と rechen との絡み合いが続いて、悲劇は終末を迎える。ディエトリーヒによって捕らえられたハゲネのところに王妃クリエムヒルトは出かけて、最後にもう一度財宝返還を要求する（2367,3-4）。財宝は今や「勝利の呪物」であり、ハゲネが財宝を返せば、クリエムヒルトが彼に象徴的に勝ったこととなる。しかし、ハゲネの方も、捕らえられているとはいえ、決して負けてはいない。「我が主君方が一人でも生きている間は、宝のありかを言わぬと誓ったのでござる」（2368,1-3）と、言葉巧みにクリエムヒルトを操って、彼女に実兄グンテルの首を打ち落とさせる。これによって、財宝のありかを知る者は神とハゲネ以外には存在しないこととなり、それではハゲネは「償い」（gelten,2372,1）をしないことになると悟ったクリエムヒルトは、ハゲネが携えていた愛しい夫ジーフリトの名剣バルムンクを鞘から抜き取って、高く振り上げてハゲネの頭を打ち落としてしまう。悲劇はことごと

とくニーベルンゲン財宝の呪いによって展開していることが理解できよう。今やハゲネからニーベルンゲン財宝の一つである名剣バルムンクを奪い返したクリエムヒルトも、その呪いによって「仕返し」(rechen, 2375, 4)を受けなければならない。この恐ろしい仕打ちに怒りを覚えた老将ヒルデブラントによって、クリエムヒルトは一太刀を加えられるのである。愛しい夫の象徴であるとはいえ、財宝に固執するクリエムヒルトもついには滅びていかなければならないのである。こうして夫への誠実と財宝の呪いとが一つになって、leit がさらに他の leit を巻き起こし、——クリエムヒルトはその leit を、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチフェル』におけるジグーネ²¹⁾ のように差し止めることができなかつたのである——宿命的な leit と rechen との絡み合いへと発展し、クリエムヒルト一個人の leit は宿命的に両民族全体の leit となって、ついには両民族の滅亡という凄惨な結末にまで至ったということ、これが、すなわち、「ニーベルンゲンの災い」(der Nibelunge nôt, B2379, 4) なのである。

結 び

以上のように見てくると、クリエムヒルトとプリュンヒルトの二つの leit は、確かに対比的に描かれているが、しかし、プリュンヒルトの leit (恥辱) はクリエムヒルトの leit (悲しみ) を引き起こすきっかけに過ぎないことが明らかである。前編において問題なのは、もはやプリュンヒルトの leit ではなく、クリエムヒルトの leit、すなわち、ジーフリトの死である。このジーフリトの死は、作品の冒頭における「クリエムヒルトの鷹の夢」においてすでに暗示されており、ジーフリトはクリエムヒルトの高きミネを求めてブルゴントの国へ旅立つ限り、最初から滅びる運命にあったのである。事実、その愛のためにはグンテル王と偽りの主従関係をも結んでしまい、それが結局のところプリュンヒルトの leit を呼び起こし、その leit がきっかけとなってついにはジーフリトとハゲネとの宿命的な対立が表面化するに至ったのである。ジーフリトの死にはこのようにジーフリトとハゲネとの宿命的な対立が根本にあるのであり、プリュンヒルトの leit をきっかけにして両者の対立が宿命的に深められ、ジーフリトの悲劇が展開していくのである。そしてこのジーフリトとハゲネとの対立の根本にあるものがニーベルンゲンの財宝であることは言うまでもない。財宝の所有者ジーフリトがウォルムスに到着したとき、ハゲネが若きジーフリトの財宝獲得の冒険について語ったのも決して古い伝説の「残物」ではなく、ハゲネが最初からその黄金に目をつけていることを示すものである。その後ジーフリトとクリエムヒルトとが結びつくようにハゲネがグンテル王にさまざまな進言をしたのも、結局は財宝へのハゲネの飽くなき欲望のなせる行為である。一旦、ニーデルラントに帰国していたジーフリト夫妻をやがてブルゴント国の饗宴に招待したときにも、さらにまたジーフリト暗殺を提案したときにも、ハゲネの魂胆はニーベルンゲンの財宝にあったことは拙稿²²⁾ でも述べてきたことから明らかである。ジーフリト

21) 『パルチフェル』第三巻(138,9-142,10) 参照。

22) 拙稿：ニーベルンゲン悲劇の構図——ハゲネの役割——236-40頁参照。

暗殺にはこのように寡猛なハゲネの財宝への欲望が関与しているのであるが、裏返して言えば、ジーフリトは財宝の呪いによって滅ぶのであって、ニーベルンゲンの財宝の所有者である限り、滅びなければならない運命にあったのである。北欧に伝承されているような財宝の呪いのモチーフがここにも保持されていることが確認されるのである。

前編のジーフリトの死が財宝の呪いによるものであるならば、後編のブルゴント族全滅の悲劇も財宝の呪いによる破滅であると考えることができよう。前編の最後の場面でハゲネは、ジーフリトを暗殺しただけでは飽き足らず、その後財宝への欲望からグンテル王にクリエムヒルトとの和解を勧め、それによってやがてはニーベルンゲンの黄金を奪い取ってライン河に沈めるのであるが、この『ニーベルンゲンの歌』に固有な財宝強奪の筋立は作品全体の構成のためにはなくてはならないものであることが容易に理解できよう。今や滅びる運命にあるのは財宝を手に入れたブルゴント族である。ブルゴント族が全滅する運命にあったことは、前編の後半でジーフリト夫妻が饗宴に招待されたように、後編の後半でブルゴント族が饗宴に招待されて、フン族の国へ向かう途中のドーナウ河渡河の場面で明らかとなる。前編では鷹の夢がジーフリトの死を予言していたように、後編ではドーナウ河の水の乙女たちがブルゴント族全体の滅亡を予言するのである。前編では英雄ジーフリトただ一人の死であったのに対して、後編ではブルゴント族全体の滅亡であり、後編は前編の高まりであることも理解できよう。ニーベルンゲンの財宝の呪いはそのデモニッシュな力によってとどまるところを知らず、大きくなっていくばかりである。前編におけるジーフリトとハゲネとの宿命的な対立も、後編に至ってはクリエムヒルトとハゲネとの対立に移っていくが、この個人的な対立もついにはフン族とブルゴント族の衝突という世界歴史的な出来事へと発展していくのである。このように二つの leit と rechen の構造の中には単なる二つの leit と rechen があるだけでなく、古い伝説に由来する財宝の呪いが奥深いところで支配しているのであり、『ニーベルンゲンの歌』は古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素が複雑に絡み合って出来上がった重層的な作品であると結論づけることができるのである。

*本稿執筆にあたってテキストには Helmut de BOOR (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage. F. A. Brockhaus Wiesbaden 1972. を用い、邦訳は相良守峯訳 (岩波文庫) を引用させて頂いたが、論述の都合から表現を一部変更したところもあることを付記しておく。